すっかんぽ

☆ 研究室だより No.8　　1992年 12月号

雑草スズメノカタビラ

欧米種 主流だった

青木作新短大助教授ら

12月6日 栃木新聞の見出しである。　スズメノカタビラと言えば、今までに散々草むしりをさせられた思い出のある"雑草の中の雑草"、まさに雑草界の王道といく存在である。　そのスズメノカタビラが今や欧米種の新入り"ツル"スズメノカタビラに王座を奪われたばかりでなく、絶滅の危機に立たされているというのだ。

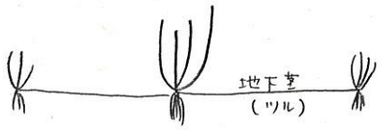
もし、これが事実だとすると、大ニュースである。　あわてて朝日、読売、下野などの紙面も捜してみたが、載っていたのは、栃木新聞だけである。　これは、栃木新聞の大ヒットだ。

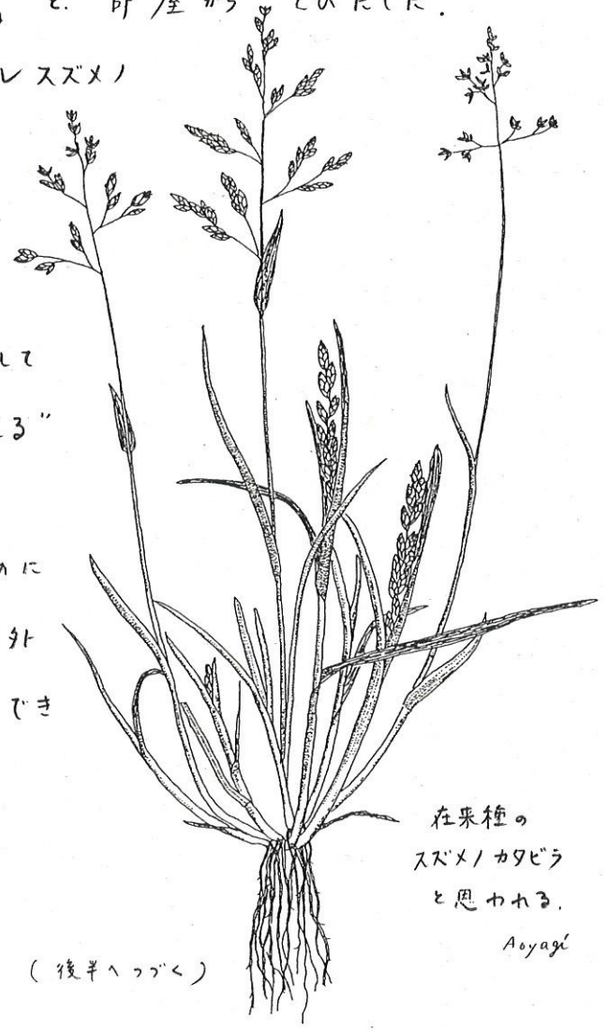
翌日、研究室で中村先生（宇大、生物学教授）にその話をすると、「青木さんなら、よく知ってますよ。　彼は、宇大の生研（注、生物研究会の略称、学生のサークル）のOBですから」…つまり、佐高で言えば、青木先生は、生物部の部員で、中村先生が生物部の顧問という関係になるのである。

これも何かの縁だと思って、連絡をとってみると、「在来種（スズメノカタビラ）と欧米種（ツルスズメノカタビラ）の見分け方は慣れないと難しいので、教えてあげましょう」と話がすすみ、会っていただけることになったのである。

12月10日、午後2時、作新短大を訪れたが青木先生はびしっとしたスーツ姿である。　校舎もこぎれいで、"あっ、ここは女子大だったんだ"とその時、初めて気がついた。　そんな中で青木先生は多少窮屈そうに淡々と語りだされたが、やがて、「実際に外でみてみましょう」と、部屋からとびだした。

「この庭にはえているのは、全て、ツルスズメノカタビラです。　ほら、これです」と、指さされたが、何が"ツル"なのか私にはわからなかった。　"ツル"という言葉から何かにまきつくものを想像していたが、そうではなく"地下茎（ツル）でふえる"という意味なのだそうだ。　つまり、スズメノカタビラは種子でのみふえるのに対し、ツルスズメノカタビラは種子以外に、地下茎で一年中ふえることができるのである。





在来種のスズメノカタビラと思われる。
Aoyagi

（後半へつづく）

タンポポの世界でも、在来種（カントウタンポポ、エゾタンポポ etc）に対し、欧米種（セイヨウタンポポ etc）が勢力を広げている。都市部ではセイヨウタンポポが中心だが、在来種が絶滅したわけではない。自然の残っている所では在来種もがんばっている。スズメノカタビラ（在来種）とツルスズメノカタビラ（欧米種）の関係もおそらく、そういうものになるのでは、と質問してみた。ところが、ツルスズメノカタビラの繁殖力はケタ違いに強いので、共存することなく、近いうちに取って代わってしまうだろうという答えだった。確かに、ツルスズメノカタビラが入ってきたのが、たかだか10数年前であるらしいことを考えると、ここまで広がっているのは驚異的である。現在の植物図鑑には、まだスズメノカタビラしか載ってないが、数年後には、逆転してしまうのではないだろうか。

青木先生は、4月に、学会で発表される予定である。はたして、その日をきっかけに、日本の雑草地図は、塗り替えられてしまうのであろうか。

新聞　1992. 12. 6　（第三種郵便物認可）

雑草スズメノカタビラ

欧米種 主流だった

青木作新短大助教授ら

芝生拡大で在来種駆逐？

「定説」覆す実態

芝生の雑草としてやっかい者扱いされているスズメノカタビラ。これまで国内では、在来型で一年草（秋に発芽し六月ごろ開花結実して枯れる）のスズメノカタビラが主流と思われていたが、宇都宮大学の竹松哲夫名誉教授と作新学院短期大学の青木彰彦助教授らの研究で、欧米型で多年草の「ツルスズメノカタビラ」が取って代わっていることが分かった。青木助教授はツルスズメノカタビラが大繁殖した要因を、ゴルフ場や道路の路肩などに輸入の西洋芝が多く張られるようになり、芝の中にツルスズメノカタビラの種子が交じっていたのではと説明。「生活様式の西洋化に伴い雑草も変化する」と話している。

スズメノカタビラとツルスズメノカタビラは外見が酷似しているものの、スズメノカタビラがアジア大陸原産の一年草なのに対し、ツルスズメノカタビラは北ヨーロッパ原産の多年草で、茎の節から発根して株を増やすなど形態的には全く別の特徴を持っている。これまで、植物学者の間では、国内では在来型のスズメノカタビラが主流で欧米型のツルスズメノカタビラはまれにしか繁殖していないと認識されていた。

しかし、青木助教授が関東一円はじめ福島県などのゴルフ場、道路側、人家周辺からスズメノカタビラと思われていた草を収集して節からの発根試験を行った結果、ほとんどに節の発根がみられ、欧米型のツルスズメノカタビラであることが分かった。

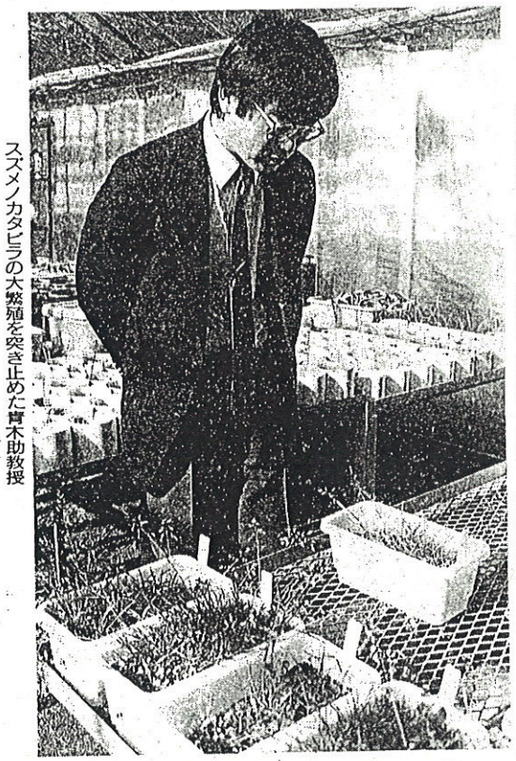
青木助教授はツルスズメノカタビラが大繁殖をした要因を「ゴルフ場をはじめ公園、一般家庭、道路の路肩などに西洋芝が植えられるようになり、西洋芝の中にツルスズメノカタビラの種子が混入していたのでは」と説明、人為的伝播（ば）であることを指摘している。加えて、種子に休眠性がなく年中発芽するツルスズメノカタビラの強い繁殖力も急激な増殖に拍車をかけているとしている。

逆に、在来のスズメノカタビラの減少については、田植え時期が一カ月ほど早まったことで、スズメノカタビラが結実前に土中に埋没、枯死してしまうためではないかとみている。

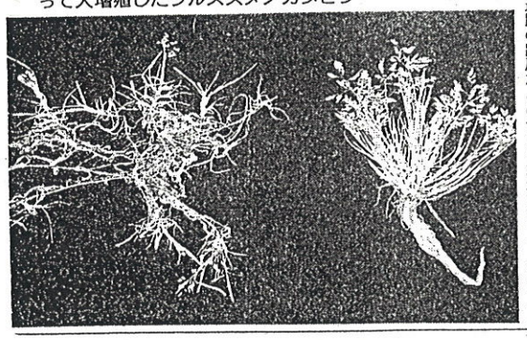
青木助教授は、ツルスズメノカタビラ大繁殖の背景を「日本人の生活様式が純日本式から西洋化へと変わっていったのと同様、スズメノカタビラが追われてツルスズメノカタビラへと変わったのでは。人間の歴史によって雑草も変化する」と話している。

一方、ゴルフ場を中心に問題となっている雑草が、ツルスズメノカタビラと分かり、その防除方法や有効利用が新たな課題となっている。

青木助教授は「防除、利用といった応用の前にツルスズメノカタビラの形態や生理生態、分布状況など基礎的な特性を解明することが必要」とし、各地のアマチュア植物研究者に協力を求め分布状況を調べるのをはじめ、発根のメカニズムなど形態を明らかにし、来年四月に行われる学会で発表したいとしている。



スズメノカタビラの大繁殖を突き止めた青木助教授



在来型のスズメノカタビラ（右）とそれに取って代わって大増殖したツルスズメノカタビラ